

明倫堂文庫蔵 宇井黙齋(崎門学派)の講義筆記の言語(II)

平澤 啓

序

1 目的

本稿は「明倫堂文庫蔵 宇井黙齋(崎門学派)の講義筆記の言語」(『宮崎女子短期大学紀要』第12号 宮崎女子短期大学 昭和六一年所収)の続篇である。

旧高鍋藩(現 宮崎県児湯郡高鍋町)の文教政策によって安永七(一七七七)年に開設された藩校「明倫堂」では、山崎闇齋学派(崎門学派)の流れを汲む漢学の講義が行われた。山崎闇齋学派では、講義と講義筆記とが重要視され、高鍋藩校「明倫堂」にも多くの講義筆記が伝えられていて、現在は「明倫堂文庫」の名称で高鍋町立高鍋図書館に保管され、『高鍋藩 明倫堂文庫図書目録』(高鍋町立高鍋図書館編 財団法人正幸会 昭和五九年)によって、その内容も知ることができる。

前稿「明倫堂文庫蔵 宇井黙齋(崎門学派)の講義筆記の言語」(以下「前稿」と略すことがある)では、明倫堂文庫に収められている多数の講義筆記のうち、高鍋藩出身で、明倫堂の開設を藩主に進言

し、明倫堂初代教授としてその基礎を築きあげた、千手廉齋(元文二(一七三七)年(文政二(一八一九)年 名は興欽)が、その師である宇井黙齋(享保一〇(一七二五)年(天明元(一七八一)年 唐津生)の講義を筆記したものを資料として用いた。そして、特に助動詞についてその言語の性格を調査し、次のような結論を得た。

助動詞の多くは現代口語で用いられるものであり、それに文語を加えた状態になっていて、方言や位相語など俗語系助動詞はみられない。

文語系助動詞は種類が少なく、また使用頻度も低く、後退した状態になっているといえる。そして、大きな特徴として、漢文訓読に用いる助動詞がみられる点が挙げられる。

直接に講義に列席して筆記した資料と、ほかの複数の筆録者が筆記した講義筆記を編集して作成した資料との間にも、語法上の違いはなく、同一の語法によって講義され、筆録されたと考えられる。そして、その語法は江戸時代における標準語文法の体系とみられる。

しかし、一言語の性格を調査するにあたっては、助動詞という一部の側面からだけでは不十分であると思われる、

一、助動詞 二、助詞 三、用言の活用 四、副用言

五、形式語

の各文法項目について調査し、その文法体系全体から判断する必要があると考える。そこで、本稿では特に助詞を取り上げて、高鍋に伝わるこの講義筆記の言語が、標準語文法の体系をもつものであるかどうかを検証していく。

2 資料と方法

資料は前稿と同様に、次の五種の講義筆記を用いた。

- 一 『易学啓蒙』(明和三〇一七六六)年 一冊
- 二 『朱易衍義』(明和三〇一七六六)年 二冊
- 三 『詩経講説』(明和三〇一七六六)年 七冊
- 四 『易経講義』(寛政一三〇一八〇)年 一〇冊
- 五 『書経集傳』(明和八〇一七七)年(享和二〇一八〇)年 一一冊

そして、助詞を分析する際には、橋本進吉博士の学説による下位分類に従って、

- | | | | | |
|-------|----------------------|----------------------|-----|------|
| 格助詞 | 接続助詞 | 係助詞 ^(注2) | 副助詞 | 並立助詞 |
| 準副体助詞 | 準体助詞 ^(注3) | 準副助詞 ^(注4) | 終助詞 | |
| 間投助詞 | | | | |

の一〇種に分けた。

また、助詞の口語か文語かを判定するにあたっては、『國文法體系論』(岩波書店 昭和三四年)『助詞・助動詞の研究』(岩波書店 昭和四四年)で橋本博士が現代口語の助詞と認定されているものは、それに従い、更に『日本文法大辞典』(松村明氏編 明治書院 昭和四六年)および『古典語現代語 助詞助動詞詳説』(松村明氏編 學燈社 昭和四四年)の記述を参考にした。

一 五資料にみられる助詞の分類

五種の講義筆記にみられる助詞の異なり語数は、全部で七〇語であった。そのうち、橋本文法に記載されている現代口語の助詞と一致するものは、

- | | |
|---------|---|
| 格助詞「と」 | 諸傳アリテソレト分カツタメニ大傳ト云
(易学啓蒙 八ウ) ^(注5) |
| 係助詞「も」 | 大傳ニ重卦モ説テアレトモ：(朱易衍義
上 七〇オ) |
| 副助詞「まで」 | 免ル、ト云マデ説キ及スコトデハ無ヒ(易
経講義 二 八オ) |

などをはじめとする四五語であり、橋本文法には挙げられていないが、『日本文法大辞典』『古典語現代語 助詞助動詞詳説』で現代語の助詞とされているものは、

- | | |
|-----------|-----------------------------------|
| 接続助詞「ながら」 | 及ハヌト思ヒナカラ口ニ謙辞ヲナセル
(書経集傳 七 二五オ) |
| 副助詞「のみ」 | コレデハ盟ハ用ニタ、ヌノミナラズ：
(詩経講説 四 二三ウ) |
| 並立助詞「の」 | 道理ノナンノト云ラ待ズ：(易学啓蒙
五オ) |

などの一三語であった。なお、橋本文法で挙げられず、それら二書でも古語もしくは古典語の助詞と記されているものの、明治期において標準語の確定に大きな役割を果たした「口語法」(國語調査委員會編 大正五年)ならびに「口語法別記」(國語調査委員會編 大正六年)で標準語の助詞として記載されているものがある。それは、

接続助詞「に」

準副体助詞「が」

全体左ハ陽右ハ陰ジャニ左ノ陽右ニ往テ
右ノ陰左ニ来リ(易經講義 一 二七ウ)
唐ノ孔穎達ガ言ヲ載セテ(書經集傳
一 二三ウ)

の接続助詞「に」(注7)と準副体助詞「が」(注8)の二語である。これら二語の助詞は、現代においては文語系の助詞とみられるが、少なくとも明治期までは広く用いられていたと考えられる助詞であるため、さきの一三語に加えて、合計一五語とすべきかと思う。したがって、これらを合わせて口語系の助詞として全部で六〇語が挙げられることになり、全体七〇語の約八六%が口語系の助詞で占められていることになる。

一方、文語系の助詞は、

格助詞「にて」

本楊子ガ文章ニテ書タトミヘル(易学啓蒙 一一ウ)

接続助詞「ども」

水能ク舟ヲ載スレトモ亦能舟ヲ覆カヘス(書經集傳 五 二四ウ)

係助詞「だに」

人トダニ生ルレバ(書經集傳 三 二三ウ)

などの一〇語が挙げられ、全体七〇語の約一四%に過ぎないという結果になっている。

結局、全体七〇語の助詞を分類してその一覧を示すと、(表1)のようになる。すべての助詞が口語系もしくは文語系のどちらかに属するものであり、方言や位相語に属する、俗語系の助詞(接続助詞「さかい」や副助詞「べい」など)がみられない点は、非常に大きな特徴として指摘できる。しかも、文語に比べ、口語が大変に多くなっていることは、五資料の言語が現代口語に非常に近いことを意

〔表1〕 異なり語七〇語の内訳

種類	口語系		文語系
	橋本文法の助詞	それ以外の助詞	
格助詞	が・の(主格を示す)・を・に・へ・と・より・から・で (9語)	して (1語)	にて (1語)
接続助詞	ば・と・ても・けれど・も・が・から・の・で・て・し・の・に (10語)	して・ながら・たり・に(Ⅱのに)・と・ても (6語)	で(打消)・ども・を・で(Ⅱの) (4語)
係助詞	は・も・こそ・さえ・でも (5語)		だに・や (2語)
副助詞	だけ・まで・ばかり・など・ぐらい・か・やら (7語)	なぞ・しも・なり・のみ (4語)	
並立助詞	と・や・やら (3語)	の・とか (2語)	
準副体助詞	の (1語)	が (1語)	
準体助詞	の・ぞ・から (3語)		
準副助詞	ながら・きり(ぎり) (2語)		
終助詞	ぞ・な(禁止)・わ・よ・か (5語)		かな・かし(がし) (2語)
間投助詞		や (1語)	を (1語)
合計	45	15	10
	60		

味しているといえる。

二 五資料の比較

五資料全体の助詞のうちで最も多い現代口語の助詞、殊に橋本文法で口語の助詞とされているものについて、五資料の間に違いがあ

〔表2〕橋本文法と一致する助詞四五語の内訳

種類	五資料にみられる助詞	四資料にみられる助詞	三資料にみられる助詞	その他
格助詞	が・の・を・に・へ・と・より・から・で			
接続助詞	ば・と・ても・けれども・が・から・て	ので・のに		し
係助詞	は・も・こそ・でも	さえ		
副助詞	まで・ばかり・など	だけ・やら		ぐらい・か
並立助詞	と	や		やら
準副体助詞	の			
準体助詞	の・から		ぞ	
準副助詞		ながら・きり(ぎり)		
終助詞	ぞ・か	な		わ・よ
間投助詞				
合計	29 (64%)	9 (20%)	1 (2%)	6 (13%)

るかどうかを検討してみる。橋本文法の助詞と一致する四五語の助詞が、五種の講義筆記のうち、いくつの資料からみられるかをまとめたものが〔表2〕である。

これによると、四五語の助詞のうち、五資料すべてでみられる助詞が二九語、四資料にみられる助詞が九語で、これを合計すると、三八語に及び、その割合は約八四%にも達する。すなわち、八割以上の助詞がほぼ各資料に共通してみられる助詞といってもよいかと思われ、異なり語の点からは資料間の助詞の違いは認められないといつてよからう。

また、用法の点でも、たとえば副助詞「ばかり」が、

我朝山崎翁バカリ也(易学啓蒙 四八才)

其中ニト筮ガ主トナルバカリノコト也(朱易衍義 上 二九ウ)

子孫ニ及バカリナラズ:(詩経講説 五 一五才)

コレバカリガ益デハ無ヒガ:(易経講義 七 三三才)

筮ニ用ル易書バカリジヤガ:(書経集傳 九 二四才)

のように、現代口語と同じく準用機能(準体助詞的機能)をもっている点ですべてが共通している。加えて、準副体助詞「の」が体言に下接するという現代口語の用法に加え、

三同而二異ナルノ説(易学啓蒙 一七才)

義理ヲ説ノ始ハ孔子故:(朱易衍義 上 二四ウ)

子ヲ愛スルノ心アレバ:(詩経講説 四 一八才)

格式定ラサルノ時節:(易経講義 一 五一才)

召公ハ成王ニ告ケラル、ノ詞デ:(書経集傳 五 一五才)

のように、活用語連体形にも下接する用法をもつ点でも共通している。

以上のことから、現代口語の助詞が各資料に共通に用いられているのみならず、また、用法においても共通点がみられるわけで、資料間の助詞の大きな差異はみられないといえる。すなわち、五種の講義筆記はほぼ等質の言語によって記されているとみることができ

三 俗語的表現形式

既に「一 五資料にみられる助詞の分類」で方言や位相語に属する助詞がみられない点を指摘した。方言や位相語は特定少数の聞き手に対して用いる語法であるから、この点に限っては五資料の言語は不特定多数の聞き手に対して用いる共通語であるといえる。

同様に日常会話などで特定少数の聞き手に話す場合には、詠嘆をはじめとする種々の話し手自身の感情をさほど制限なく表現する。これは助詞の中では終助詞・間投助詞を用いることによって表現するものであるが、五資料にはこれら二種の助詞の使用度が非常に低くなっている。「表3」は橋本文法で挙げられている現代口語の助詞

〔表3〕橋本文法と五資料との助詞の比較

種類	橋本文法				種類	橋本文法				
	格助詞	接続助詞	係助詞	副助詞		準副体助詞	準体助詞	準副助詞	終助詞	間投助詞
橋本文法	9	10	7 ^(表2)	7	橋本文法	1	3 ^(表3)	3 ^(表4)	11	3
用例	9	10	5	7	用例	1	3	2	5	0

の語数を上段に、そのうちで、五資料にみられる助詞の語数を下段に、それぞれ異なり語数で示したものである。格助詞や接続助詞のように、橋本文法で挙げられている助詞がすべて用いられているものもあるが、両者の間で大きく隔たっているものとして、並立助詞・終助詞・間投助詞の三種が指摘できる。その三種の助詞で、橋本文法で助詞として挙げられていて、五資料にみられない助詞は次のとおりである。

並立助詞：に か なり だの
 終助詞：や ぜ とも な(なさい) て い
 間投助詞：ね な さ

一部の並立助詞を除くと、文章語で用いられるというよりはむしろ口頭語で用いられる助詞であり、しかも終助詞・間投助詞は話し手自身の個人的感情を表現する助詞である。そこで、五資料にみられる口語系と文語系とを合わせた、終助詞と間投助詞の用例を次に示す。

終助詞
 ぞ 何ノツミヲ得タルコトゾ(詩経講説 四
 一ウ)
 な(禁止) 必去ルコトヲ求メラレルナト也(書経集
 傳 一一 八ウ)
 わ 直ニ卑高以ノ造化ジヤハト云コト也(易
 経講義 三 八ウ)
 よ ソノマ、ノコトヨトテ：(詩経講説 三
 一八ウ)
 か 大全ニヨツテ学ブツモリカ(朱易衍義
 上 四〇ウ)

間投助詞

かな	太極陰陽ノ外無ヒカナ (易学啓蒙 三三五)
かし (がし)	御ランアレカシト思ヘトモ (朱易衍義 上 五〇ウ)
や	今ヤノト待テ (詩経講説 三 三九ウ)
を	無キコトデアルモノヲヤト也 (書経集傳 七 四六ウ)

これらの終助詞・間投助詞の用例を見ると、二種類に分類ができる。すなわち、実際の講義の部分に用いられている助詞と、会話文にのみ用いられて、その会話の話し手の感情を表すものであり、講述者宇井黙齋の感情を表現しているものではない助詞とがある。前者を第一種、後者を第二種とすると、九語の助詞は次のように分類される。

- 第一種：ぞ か や を
 第二種：な わ よ かな かし (がし)

終助詞「ぞ」は五資料において使用度は高いものの、助動詞「なり」「じゃ(ぢや)」「や」である「などの文末辞の一種として用いられているものであり、用法も現代口語の「ぞ」が活用語終止形のみ下接するのに対して、用例として示したように体言に下接したり、また、

九マデノ数ノワケハドウゾト問タコト也 (易学啓蒙 一七ウ) のように、副用言に下接する例もあり、現代口語とは用法の幅に違いが認められる。終助詞「か」は現代口語と用法は同じであるものの、多く原文の疑問や反語の意を解釈するのに用いられている。間

投助詞「や」は呼び掛けには用いず、一般に副詞に下接して意味を強めるといわれる用法に限定されているため、文章語の用法しかもっていないものである。また、間投助詞「を」は文語系の助詞であり、必ず係助詞「や」と結合する例しかなく、用法は非常に限定されていて、しかも、

況ヤ聖人ニ於ラヤ (易経講義 一〇 四二オ)

のように、副詞「況や」を受けて反語を表す、漢文訓読の語法もみられ、終助詞「か」と同様に原文の解釈に用いられているだけである。結局、第一種の助詞は講述者宇井黙齋の個人的感情を表すためには全く使われていないのである。また、第二種の助詞も会話部分の原文を解釈する際に、そこに登場する話し手の言葉として、話し手の感情を細かく表現しようとして用いているものであり、第一種と同様、講述者の感情を表してはいない。

〔表4〕終助詞・間投助詞の延べ語数

第二種		第一種				区分			
かし	かな	よ	わ	な	を	や	か	ぞ	助詞
							1		易学啓蒙
1							1		朱易衍義
	1						2	1	詩経講説
							3	2	易経講義
							1		書経集傳
1	1	0	0	0	0	0	8	3	合計
2					11				総計

更に、これらの使用度数の点でも両者に違いがみられる。各資料からアトランダムに二五〇〇字分を抜き出し、そこに含まれる延べ語数を示したものが〔表4〕である。第一種・第二種ともに延べ語数は少ないが、第二種の助詞は大変に少なく、使われる箇所が非常に限定されていて、講義をするのに不可欠な語法ではないといえよう。したがって、講述者自身の個人的感情を表す俗語的表現形式は認められないのである。

このことに関連して、口頭語では接続助詞で文を終止する、いわゆる終助詞的用法があるが、会話部分に、

位ハ異ナルトモ数ハ同コトデアリソウナガト問タコト也(易

学啓蒙 一九ウ)

という例が一例だけみられる。多数の接続助詞の用例の中で唯一であるから、むしろ例外的であるが、会話部分にみられる第二種の終助詞・間投助詞と同様の用法である。

次に、分類上では口語の助詞でありながら、たとえば江戸期の戯作物にみられるような、上接語や下接語、またほかの助詞などと音が融合している例があれば、むしろ俗語系の助詞であると判定すべきである。この点についても五資料にみられる助詞には、

格助詞「に」||係助詞「は」

乱世ナドニハアリ易キモノジヤガ:(書経集傳 六二

四オ)

打消の助動詞「ね」(已然形)||接続助詞「ば」

本旨ヲ合点セ子バアヤマルコト也(易学啓蒙 二オ)

接続助詞「て」||用言「おる」

何レノトキヨリ本義序例ノアトニ載テラルカ(易經講義

一 二四オ)

のように、いずれの場合にも融合する例はみられず、会話部分でも、
河水ノ枝流デハナヒト云タレトモ:(書経集傳 一一 二二オ)
のように同様である。したがってこの種の俗語的表現形式も全くみられないといえる。

同様に、たとえば副助詞「ばかり」と異形態の関係にある「ばっかり」「ばかり」「ばつかし」「ばつかし」などを用いたり、接続助詞「けれども」と異形態の関係にある「けれども」「けれども」「けど」「けど」などを用いたりすることも、口語系というよりはむしろ俗語系と考えられる。この資料では副助詞「ばかり」と接続助詞「けれども」に関しては、

王城畿内六百里ニ及テラルバカリデ:(詩経講説 一一 一オ)

此道理ヲ人ニ付與セラル、ケレトモ:(書経集傳 四 一七

オ)

人ガサヤフニ申スケレトモソウデナヒト女ノ云(詩経講説

一 一六五オ 会話文)

のような「ばかり」「けれども」の形態のみが用いられているが、副助詞「など」に関して、

乾坤交テ泰トナルナド、云テ:(朱易衍義 上 七〇オ)

のような「など」の形態以外に、次のような「なぞ」の形態もみられる。

壁ナゾニ木ヲモタセカケテ:(書経集傳 八 一三ウ)

「なぞ」の形態について『口語法別記』で、

「なぞ」を「なんど」、又わ「なぞ」「なんぞ」とも云う、「なんか」とも云うが、用いぬがよい。(三二九頁)

と書かれていて、結局「なぞ」を標準語の語形と指定し、それ以外の語形をすべて排除していることがわかる。

したがって、明治期において標準語として認められなかった助詞

を講義で用いているわけで、講義筆記の言語に共通語的性格をもたない語法が含まれているということになる。ところで、湯澤幸吉郎博士は『増訂 江戸言葉の研究』（明治書院 昭和三二年）で「など」よりも「なぞ」の方が普通に用いられていたようであると推察なさっているが、講義筆記に「なぞ」が用いられているのもこのような理由によるのであろうか。〔表5〕は各資料の二五〇〇字分に含まれ

〔表5〕 副助詞「など」と「なぞ」の延べ語数

助詞	易学啓蒙	朱易衍義	詩経講説	易經講義	書經集傳	合計
など	3	2	6	2	1	14
なぞ	0	0	0	0	0	0

る「など」と「なぞ」の延べ語数を示したものであるが、これによれば、講義では「など」を普通に使用し、「なぞ」は非常に少ないことがわかる。実際に「なぞ」の例がみられるのは『書經集傳』だけであり、ほかの四資料にはみられないので、湯澤博士のご見解によるものとはいえないであろう。むしろここで注目すべき点は、異形態「なんど」「なんぞ」「なんか」を用いず、「なぞ」だけを用いている点である。すなわち、「なぞ」は明治期においても、また現代においても、標準語とは認められない助詞であるが、少なくとも、江戸期においては講義として用いることのできた副助詞であり、それ以外の異形態「なんど」「なんぞ」「なんか」は「ばかし」や「けれど」などと同様にその資格のない副助詞だったのではないだろうか。しかし「なぞ」よりは「など」を標準的な形態と意識していたため、「など」を多用し、わずかに「なぞ」を用いたと見るのが妥当であると考えられる。

以上の各点から、五資料には一部の会話部分に会話らしさを表すために俗語的表現形式がみられるだけで、講述者から筆録者へ講義している箇所では、それが全く用いられていないといえる。

四 口語系の助詞

次に五資料にみられる口語系の助詞六〇語について、更に詳細に観察をすすめる。

まず、現代口語と用法の異なる助詞として、格助詞「より」「と」「を」「して」と準副助詞「の」「および係助詞「こそ」が挙げられる。

格助詞「より」は、

父母ヨリ兄ヲ輕ンジ：（詩経講説 三 五七ウ）

のように、現代口語と同じ用法もあるが、それ以外に、

何カラ何マデ仁ナレトモ：（易学啓蒙 一〇ウ）

のような格助詞「から」の用法に近い、

一ヨリ十マデ合乗タル数也（易学啓蒙 九ウ）

という用法もある。また、

古易ヲ見ザルヨリノ疑也（朱易衍義 上 三六ウ）

文王西伯トナラレテヨリ九年デマダ大統成就セズニ：（書經

集傳 四 六ウ）

のような準体助詞の用法までみられる。これらは文章語的色彩の濃い用法であり、現代口語に比べて、その分、用法が広くなっている。格助詞「と」もそれと同様で、現代口語の用法に加えて、前稿でも指摘したように、

易ノ吉凶モソレカラ出来タモノジャト也（易經講義 三 九

オ)

のように、助動詞「なり」に上接する用法がある。これは比較的多くみられる用法であり、講義の一語法として用いられていたと考えられよう。

格助詞「を」も、

周公ノ辞ヲ象ト云（朱易衍義 上 七ウ）

のように、動作・作用の対象を表すなどの現代口語の用法だけでなく、格助詞「して」と結合し、使役の助動詞「しむ」と呼応する、

民ヲシテ吉凶悔吝ノ道ニ迷ハザラシメンタメニ：（易經講義

五 一ウ）

の用法がある。逆に格助詞「して」には現代口語の用法がなく、常に格助詞「を」に下接する用法のみであるが、これは漢文訓読の語法（注12）であり、文章語として正式な語法といえるものである。

次に、準副体助詞「の」は「二 五資料の比較」で示したように、活用語連体形に下接する用法や、

天ヨリノ御イケン也（書經集傳 三 二五ウ）

陰陽マジリテノナヤミジャ（易經講義 五 二二オ）

のように、格助詞「より」や接続助詞「て」に下接して連体修飾成分を構成する用法もみられる。殊に、活用語連体形に下接する用法は、従来、破格や誤謬とされてきた語法のうちで、広く用いられているものを普通文に用いることを許容した「文法上許容ニ関スル事項」（文部省 明治三八年）に記載されている語法であるから、文章語の用法が加わっているといえるものである。ただし、各資料からの二五〇〇字分に含まれる準副体助詞「の」の上接語の数は、体言（注13）が四四〇語、用言（活用語）が一三語という具合に大きな開きがあるため、活用語に下接する文章語的用法はわずかにみられる程度で

ある。

また、係助詞「こそ」は、

天子ノコトヲコソ王ト云也（書經集傳 三 二一オ）

兄弟合ヘバコソ永ク和樂シタノシムコトガナル（詩經講説

三 一四ウ）

のような現代口語と同じ用法以外に、

六十四段ニナツタコトデコソアレ（朱易衍義 上 五七ウ）

悪ヲナスデコソアレト也（詩經講説 六 四オ）

のように、活用語已然形と呼応する係り結びの用法もある。ただし、係り結びとなつている例は少なく、しかもほとんどが文末辞「である」に用いられて「でこそあれ」の形態をとるものである。湯澤幸吉郎博士が『室町時代言語の研究』（大岡山書店 昭和四年）で、室町期の抄物には、係り結びの法則が係助詞「こそ」にしかみられないが、それとてすべての場合に已然形で文を終止するとはいえず、係り結びの法則が崩れていることを指摘（注14）されている。江戸期の講義筆記の前身である室町期の抄物における、このような状態を考えると、五資料にみられる係助詞「こそ」は、已然形で文を終止している用例数が非常に少なく、かつ、係り結びとなる用言が限定されているのであるから、室町期より更に衰退した状態にあると考えられよう。

以上の六語の助詞をまとめると、現代口語と用法が異なつて、文章語の用法のみみられるのは格助詞「して」だけであり、ほかの五語に関しては現代口語の用法と文章語の用法との両方がみられるわけである。したがって、これらの助詞の用法が現代口語と違いがあるといても、俗語的用法をもつているという違いではなく、文章語に用いる文語的用法をもつているという違いであるから、五種の講義

筆記に口語系と文語系の助詞だけがみられる点と全く矛盾はないのである。

そこで、文語から口語への移行という観点から、接続助詞「から」と準副体助詞「の」「が」とについて検討を加えてみる。

まず、接続助詞「から」については、原因・理由を表す従属節を構成するのにどれほど用いられているかという点で検討する。五資料には、原因・理由を表す際に、現代口語の接続助詞「から」を用いた、

音ヲカヘルカラ實ト云タルモノデ：(詩経講説 一 四七オ)
 のような語法以外に、

須ハモトメルトモ訓スル故マチガヒノ無ヒタメニ待也トナサ
 レタモノ也(易經講義 五 二五オ)

前ニラヒテモ註トナルコト故ニ如此云ヘリ(朱易衍義 上
 四オ)

必竟上テ用ヌニヨリテ荒野ニノガレ去コトナレバ：(書經集
 傳 四 二二オ)

ソコヲ見ライタ処ガフルキニヨツテヤ子ハヤ子ノアリ処柱ハ
 柱ノアリ処ニアルコト也(易学啓蒙 六六オ)

などの、形式体言「故」を用い、体言にも用言にも下接する「ゆえ(ゆえに)」の語法と、形式用言「因る」を用いた「によりて(によつて)」の語法とがあり、(表6)に各資料の二五〇〇字分に含まれる、これらの語法の用例数を示した。資料によってやや比率に違いはあるものの、おおむね「ゆえ(ゆえに)」が多く用いられ、次に「から」が続き、「から」の従属節全体に占める割合は約四分の一あまりに留まっている。ただし、「ゆえ(ゆえに)」の四八例のうち、体言に下接する例が二四例、用言に下接する例が二四例であり、「から」

〔表6〕原因・理由を表す語法(括弧内の数字は%を表す)

語法	易学啓蒙	朱易衍義	詩経講説	易經講義	書經集傳	合計
から	2 (14)	5 (42)	5 (36)	7 (35)	2 (13)	21 (28)
ゆえ ゆえに	12 (86)	5 (42)	9 (64)	12 (60)	10 (67)	48 (64)
によりて によつて	0 (0)	2 (16)	0 (0)	1 (5)	3 (20)	6 (8)
合計	14 (100)	12 (100)	14 (100)	20 (100)	15 (100)	75 (100)

が用法上、用言にしか下接しないことを考えれば、用法の幅広さによつて「ゆえ(ゆえに)」が多用されるのも当然のことかと思われる。

しかし、用法についてももう少し検討すると、接続助詞「から」と同形の準体助詞「から」が叙述成分に含まれる。

根トナルモノアルカラ也(易經講義 五 一二ウ)
 のような用法が、「ゆえ」「によりて」にも、

坤ハスベルコトナラヌ故也(易学啓蒙 七四ウ)
 コレガナイニヨリテ也(書經集傳 三 一一オ)

のようにみられ、同様に準副体助詞が下接し、連体修飾成分に含まれる、

詩ノ意ヲ知ラヌカラノコト也(詩経講説 五 二八ウ)
 のような用法も次のようにみられる。

異説ニテモアルコトヘノコトカ(書經集傳 五 二三ウ)

熟字ニツカフテアルニヨリテノ改点也（易經講義 一 五〇
オ）

したがって、「から」「ゆえ（ゆえに）」によりて（によつて）の三語法は用法上に違いが認められないといえる。それにもかかわらず、口語の「から」の使用回数が少なく、漢文訓読の語法^{（注16）}であり、文章語として正式な語法である「ゆえ（ゆえに）」によりて（によつて）を多く用いるのはなぜであろうか。講義という場面では、ともに共通語的性格をもつ三種の語法ならば、文章語的語法を多用しても、何ら支障はなく、口語よりも文語の方に共通語意識が強く働いたためであると考えられないだろうか。

次に、同じ用法をもちながら、『口語法別記』で標準語の助詞と指定された文語系の準副体助詞「が」と、現代口語の準副体助詞「の」とを比較してみる。「が」は確かに『口語法別記』で標準語として記載されたが、「但し、用いられることが狭い。」（三一〇頁～三二二頁）とも記述され、既に明治期において現代口語の「の」へかなり移行（表7）準副体助詞「の」と「が」の延べ語数

が		の		準副体助詞
用言	体言	用言	体言	上接語
		3	99	易学啓蒙
1		3	101	朱易衍義
2		6	72	詩経講説
			83	易經講義
		1	85	書経集傳
3	0	13	440	合計
3		453		総計

していたことが伺える。

この点について五資料でも同様のことがいえる。（表7）は各資料二五〇〇字分における準副体助詞「の」「が」の延べ語数を示したものであるが、圧倒的に「の」が多く用いられていて、むしろ「が」は例外的といってもよいほどの数しかみられない状態である。しかも、上接語が体言であっても用言であっても、「の」の方が多く用いられているわけで、上接語による使い分けもみられないといえる。更に、「の」を用いる連体修飾成分がどのような体言でも修飾しているのに対して、「が」の場合には修飾する体言に限定がある。殊に、活用語と「が」とで構成される連体修飾成分は、

見ルコトノ美シキガタメ斗リデ無ク：（易經講義 一 六ウ）
民ヲアハレマンガ為ジヤ（書経集傳 四 一九ウ）

のように、形式体言「ため」以外に修飾する体言がない。したがって、修飾する体言に限定がある、すなわち用法に限定があるということからも、「が」が衰退していることがわかる。結局、これらのことから、準副体助詞「の」と「が」との間には非常に大きな違いがあり、現代においては文語系とみられる「が」がほとんど用いられないのに対して、普通には現代口語の「の」が使われている状態にあるといえる。換言すれば、文語から口語へとかなり移行変わって、いくぶんか文語の名残が認められるに過ぎない程度にまで口語への移行が進んでいるのである。

以上のことから、五資料にみられる口語系の助詞六〇語は、そのうちの七語に現代口語との用法の違いがあるだけで、九割までが現代口語と用法の上でも一致している。しかも、その用法の違いは、実に文語的用法をもつという点のみであり、かつ、その文語的用法はかなり衰退しているため、現代口語に近くなっているといえる。

それでは、文語系の助詞に関しても、やはり口語への移行がみられるのであろうか。この点について、次章で検証を行う。

五 文語系の助詞

五資料にみられる一〇語の文語系の助詞を更に分類すると、文語系とはいうものの、江戸期になってから生じた助詞と、平安期におこなわれた、いわゆる文語文法に含まれる助詞とに分けられる。

前者には、第一に、

ジツトラサメ藏ステソコテ発生スルノ根トナル(易学啓蒙 五三オ)

のような接続助詞「で(Ⅱので)」が該当する。接続助詞「で」は『日本文法大辞典』で古語の接続助詞として記載されているが、平安期の用例はなく、『古典語現代語 助詞助動詞詳説』で現代語「で」の項目にその成立に至るまでの一過程として示され、江戸期に多く出現すると記述されている。^(注18) また、厳密に区別すると、第二として、

メデタキ吉デアレガシトノ情也(易經講義 四 一一オ)

のような終助詞「がし」が該当する。五資料のうちには、「かし」という形態もみられ、同時に「がし」という形態もみられるため、「三俗語的表現形式」で「かし(がし)」として「かし」の用例を示したが、「かし」は平安期に用いられた形態であり、「がし」は江戸期に現れた形態であるのならば、「かし」と「がし」とは異なる助詞と見るべきであろう。したがって、文語系の助詞を合計一語とし、以上の二語と、それ以外で後者に属する九語とを分けて、前者を平安期の文語文法に含まれない助詞として文語系の助詞から除外してよいかと思う。

次に、後者の九語を『室町時代言語の研究』に記載されている助詞と、そうでない助詞とに分けると、前者には、

接続助詞…で(打消の意)^(注20) ども を

係助詞…だに や

終助詞…かな かし

の七語が、後者には格助詞「にて」と間投助詞「を」の二語が該当する。九語のうち七語までが室町期の抄物に用例がみられるわけで、すなわち、文語系の助詞の中で、室町期における講義で用いられ、江戸期においても引き続き講義に用いられた助詞が、そのほとんどを占めているのであり、これは文語系の助詞の非常に大きな特徴であるといえる。

そこで、これら七語の助詞を更に検証すると、まず、平安期の文語文法と用法が著しく異なるものとして係助詞「や」が挙げられる。『室町時代言語の研究』でも既に「や」には係り結びの法則が崩れていることが記述されているが、五資料でもそれは同様であり、しかも、使用回数が少ないうえに、

コノ黄鳥ト異ナルヤ否ヲ知ラズ(詩經講説 一 三九ウ)

のような、並立助詞的用法を含め、

道モコレギリニ絶ルヤイカニ(易經講義 五 五三ウ)

のように、文中で用いられることはほとんどない。結局、副詞「況や」と呼応したり、

安ソゾドウシテ知レヤウカヤ(易学啓蒙 三〇オ)

何ソ穀ヲ重シテ五行ヲ軽ンセンヤ(書經集傳 七 二一ウ)のように、副詞「いづくんぞ」や「なんぞ」と呼応する漢文訓読の語法を含めた、

マルクヒキマハスコトラ云ヤ(朱易衍義 上 二八オ)

のように、文末に用いる終助詞的用法が主となっている。したがって、用法の面でも平安期の文語文法に属する助詞とは認めがたいといえる。

総じて文語系の助詞は口語系に比べ、使用回数が大変に少ない。更に、文語の用法を十分にもちあわせていないなどの点を考えると、文語の衰退がかなり進んでいると判断できる。そこで、最後に文語系の助詞の中では特に使用回数の多さが目立つ接続助詞「ども」を検討する。

逆接を表す接続助詞の異なり語数を示した〔表8〕からは、現代口語の「けれども」が非常に少なく、文語の「ども」が優勢である。

〔表8〕逆接を表す接続助詞の延べ語数(付「といえども」)

接続助詞	易学啓蒙	朱易衍義	詩経講説	易経講義	書経集傳	合計
が	5	3	3	0	0	19
けれども	0	3	0	2	0	5
ども	10	12	7	8	8	45
(といえども)	3	0	1	1	1	6

しかも、「ども」には活用語已然形に下接して従属節を構成するだけでなく、

六ト云ヘトモ五ヲ帯テラル(易学啓蒙 一二ウ)

のように、漢文訓読の語法「(注22)といえども」としての用法もあり、質量ともに豊富であるといえる。しかし、

各用アルデアラフケレトモ：(易学啓蒙 四七ウ)

コレモ切込ミタカラウケレトモ：(朱易衍義 上 一九ウ)

ソウモ見ラル、ケレドモ：(詩経講説 六 六ウ)

此レガ易ノ序ジヤト云ハル、ケレトモ：(易経講義 一 二四ウ)

摂位ヲ命セラレルケレトモ：(書経集傳 七 三二ウ)

のように、全資料から「けれども」の用例がみられ、また異形態の関係にある「けれど」などがみられないことから、江戸期において「けれども」が共通語としての資格をもっていたことは否定できないであろう。結局、『室町時代言語の研究』に「が」「ども」は記載されているが、「けれども」が記載されていない、換言すると、室町期の講義では「けれども」が用いられていなかったわけで、「けれども」の発達が江戸期においても不十分であったと想像され、未発達な「けれども」よりは「ども」の方が共通語として多く使われたことが原因であると考えられる。したがって、文語であっても、共通語として強く意識された助詞を使ったわけであるから、共通語以外の語法を用いたことにはならないのである。

まとめ

以上の考察をとおして、宇井黙齋講述 千手廉齋筆録の五種の講義筆記の助詞について、次のようにまとめられる。

- 一 講義筆記にみられる助詞のうち、異なり語で約八六%までが口語の助詞であり、残り約一四%の文語の助詞に比べ、非常に口語の比率が高くなっている。
- 二 俗語系の助詞は会話部分の一部に用いられるだけで、講義に関しては俗語的語法がみられない。
- 三 文語系の助詞は漢文訓読の語法を含んでいて、多くは室町期の

抄物にもみられる助詞であり、室町期から引き続き講義の言語として使われたものとみられる。しかも、使用回数が少なく、用法も限定されているものが多く、文語が衰退し、口語へと移行している状態にある。

四 これらの特徴は資料間に違いがなく、どれも同じ文法体系をもつ言語で記されているといえる。そして、その文法体系とは、共通語的性格の強いものであり、標準語文法の江戸期における文法体系と見ることができ。 (昭和六十二年九月三〇日受理)

注1 各資料に関する詳細は拙稿「明倫堂文庫蔵 宇井黙齋(崎門学派)の講義

筆記の言語」九二頁～九一頁を参照。

注2 橋本文法では係助詞として、

は も こそ さえ でも なりと しか ほか

の八語を挙げているが、本研究では「ほか」を形式体言の項目で扱っため、係助詞から除いた。

注3 橋本文法では準体助詞として、

の ぞ から ほど

の四語を挙げているが、本研究では「ほど」を形式体言の項目で扱っため、準体助詞から除いた。

注4 橋本文法では準副助詞として、

ながら がてら きり まま

の四語を挙げているが、本研究では「まま」を形式体言の項目で扱っため、準副助詞から除いた。

注5 引用文の下に、資料名 巻 丁を示した。資料名は略称を用いず、「2 資料と方法」に掲げた書名をそのまま記した。巻については『易学啓蒙』は全一冊であるため、巻の表示を省略したが、『朱易衍義』は「上・下」をもって、その外は数字をもって記した。丁は数字で示し、続いて表・裏をそれぞれ「オ・ウ」で記した。

注6 『口語法』は明治三十九年に稿案が成ったため、刊行は大正期であるが、明治期において広く用いられていた語法が記載されていると考えられる。

注7 『口語法別記』には口語の歴史的変遷や地域的差異が記述されている。

『口語法別記』の「の」の項目に、「の」なしに、「に」とばかりでも用いる。(三七二頁)とあり、接続助詞「に」を認めている。

注8 『口語法別記』「が」の項目に、名詞と名詞とを繋ぐもの、(三二〇頁)とあり、準副体助詞「が」を認めている。

注9 『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』(山田孝雄博士 宝文館出版 昭和一〇年)三三八頁～三四五頁、また『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』(築島裕博士 東京大學出版會 昭和三八年)七三八頁を参照。

注10 同書六七三頁。

注11 注1に記した拙稿八五頁。

注12 『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』九四頁～一〇二頁、また『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』三二七頁などを参照。

注13 本稿(表7)に示してある。

注14 同書三四七頁～三四八頁。

注15 (表6)の用例数は、すべて従属節を構成しているもののみであり、準体助詞の用法の例は除いた。

注16 「訓讀文の文体史」(白藤禮幸氏 講座 日本語学7 文体史I) 明治書院 昭和五七年所収)一二七頁を、また「ゆえ(ゆえに)」については『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』三八七頁～三八八頁を、「によりて(によつて)」については同書七〇九頁などを参照。

注17 同書五一三頁中段。

注18 同書四三七頁。

注19 『古典語現代語 助詞助動詞詳説』「かし」の項目の「1 語誌」六四九頁、また、『増訂 江戸言葉の研究』「がし」六三三頁～六三四頁を参照。

注20 『室町時代言語の研究』では「で」を助詞として扱わず、打消の助動詞の中(二〇五頁)で挙げている。

注21 「いずくんぞ…や」については『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』四五三頁を、「なんぞ…や」については同書二二七頁を参照。

注22 『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』三〇〇頁～三〇四頁、また『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』七〇九頁を参照。